

佐賀新聞 二〇二二(平成二四)年七月二十日

岡田三郎助「まぼろしの名画『裸婦』」特別公開に寄せて(上)

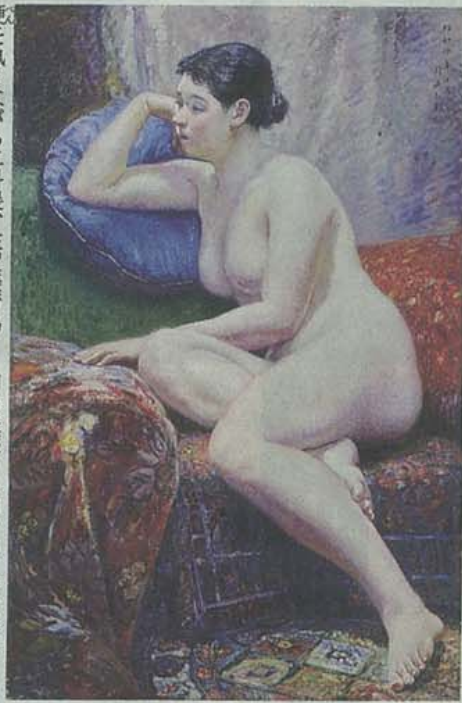
寄稿 野中 耕介 県立美術館学芸員

ついに姿を現した岡田三郎助のまぼろしの名画『裸婦』(1935年作)。その公開前に、作品を熟覧してはとっと思いついたことがあった。「この裸婦の模写を見たことがある」

記憶は確かであった。模写したのは洋画家高柳種行(1907~64年)で、その画集(2001年刊)に図版が掲載されている。高柳の「岡田三郎助『裸婦』模写」は4号(33・3×24・2寸)の小品で、1949(昭和24)年の制作。模写といってもオリジナルを忠実に再現したものではなく、その写意を汲みつつも、色彩としてフォルムを高柳自身の造形感覚・物象をより単純化し面的に構成する画風で表現したような作である。

高柳は諫早生まれの杵島育ち。31(昭和6)年に東京美術学校(現東京藝大) 図画師範科を卒業後、図画教師として朝鮮総督府師範学校、のち大邱師範学校に奉職する。その間、朝鮮総督府美術展覧会に洋画の裸婦像を出品し特選を受賞、同展の委員もつとめた。戦後は江北町に住み、佐賀中学(佐高)や佐賀大学で教

「岡田三郎助—まぼろしの名画『裸婦』—特別公開」に寄せて(上)



岡田三郎助『裸婦』(1935年、油彩、キャンバス、99・8×65・5寸、個人蔵)

鞭を執りながら二科展、佐賀美術協会に出展。県洋画壇の抽象的表現の嚆矢であり、その特異な表現は今なお鮮烈な輝きを放ち続けている。

既報のとおり、岡田の『裸婦』は35(昭和10)年以降は李王家の所蔵となり、以後、具体的な時期は不明だが、李王家美術館(現徳寿宮美術館)で展示されたと考えられる。高

柳の経歴から判断して、彼が岡田の『裸婦』を見たことだったはずである。では、なぜ高柳は岡田の『裸婦』を戦後に模写したのだろうか。二男の高柳博氏(二科会会友)にもその確たる理由は分からないという。模写のことは父から聞いたことがな



高柳種行岡田三郎助『裸婦』模写(1949年、油彩、板、33・3×24・2寸)

く、当時の日記にも記されている。「さうに(父が)韓国で描いた作品は一切、内地に持ち帰ることができなかった」。高柳は記憶を頼りに、あるいは当時の印刷物等を参考にして岡田の『裸婦』を模写したのであろう。

高柳の画業はその始まりから裸婦

追憶、そして決別—もう一つの『裸婦』

像とともであった。記録によれば、美術学校の卒業制作から韓国在住時代に於いて、高柳は一貫して裸婦像を描き続けている。そして同郷の「大家」、また美術学校の師の一人である岡田三郎助は、高柳にとって限りない尊敬と思索の対象であり、その渾身の作『裸婦』の煌めきは、忘れがたく彼の脳裏にあったに違いない。

しかし戦後、これらは全て遠い記憶となってしまった。その記憶の光彩がいかに眩いものであったか、

先の博氏が「しみじみと語った次の言葉からも察することができよう。引き揚げてきたばかりで生活が苦しく、(父は模写を)画材もない中でよく描いたと思う」

模写を通して、高柳はこれらへの思いを密やかに噛みしめたであろう。それと同時に、あえて同郷の敬すべき大家の作を模写することは、高柳にとって戦後一師とは趣を異にする造形の境地へとより深く踏み込んでいくことへの決意と、過去の訣別の意味もあったのかもしれない。『裸婦』模写以降、高柳は裸婦像を手がけることなく、より抽象性を強めつつ独自の造形を模索していくことになる。

模写から2年後の51(昭和26)年、高柳は「梅」と題した作品を春季二科展に出品し新人賞を受賞する。二科という場を得て、独特の造形世界はいよいよ大きく開花するのであった。

▽高柳種行「岡田三郎助『裸婦』模写」は、県立美術館の「岡田三郎助—まぼろしの名画『裸婦』—特別公開」で9月2日まで展示されている。